

二条離宮の大広間 ～〈大広間〉一の間～

二条城二の丸御殿障壁画は、寛永3年（1626）、後水尾天皇（1596-1680）の行幸を前に行われた二条城の大改修の際、狩野派の絵師たちによって描かれました。今年度は、「シリーズ二条離宮の時代」と題し、離宮時代に焦点を当てて、二の丸御殿の障壁画を紹介します。

二条城は、慶長8年（1603）に徳川家康（1543-1616）が、将軍上洛時の滞在场所、また儀礼を行う場所などとして創建され、後水尾天皇（1596-1680）の寛永行幸（1626）に際して二の丸御殿の大改修などが行われました。

明治維新以降、太政官代や京都府の所管になるなど変遷を遂げ、明治17年（1884）に皇室の別邸である離宮となり、その名称を二条離宮に改めました。昭和14年（1939）、二条離宮は京都市に移管され、現在にいたります。

離宮時代の二の丸御殿

幕末、二条城は徳川慶喜（1837-1913）による大政奉還の発表の場所になるなど激動の時代を経験し、また、二の丸御殿は明治維新後に様々な役割を担いました。二条城が二条離宮になると、宮内省によって二の丸御殿の修繕が行われ、また皇室の宮殿に相応しいよう絨毯が敷かれるなどして、明治19年に完了しました。同30年代には、廊下などの障壁画が、新しいものに交換されました。

同26年から27年にかけて、京都御所の北にあった桂宮家の御殿（桂宮御殿）が、空き地となっていた本丸に移築されて本丸御殿になると、二条離宮には本丸御殿と二の丸御殿の二つの御殿が整います。

本丸御殿は、皇族の宿泊所として使われ、嘉仁皇太子（後の大正天皇）や裕仁皇太子（後の昭和天皇）の行啓が頻りにされるようになりました。二の丸御殿は、行啓の際に皇太子らが拝観するだけでなく、時には京都在住の名士らとの拝謁の場所や外国から訪れた貴賓の休憩所としても用いられました。

大正4年（1915）の大正天皇の即位式の際は、現在の清流園あたりに饗宴場が設けられました。

二条離宮へ皇太子が行啓した際、皇太子らを一目見ようと、東大手門の前に数百人が集まることもありました。

〈大広間〉の障壁画

江戸時代（1603-1867）、徳川幕府の城である二条城の〈大広間〉は、徳川将軍と公式に対面する儀礼の場であり、将軍の権威を誇示する最も格式の高い場所でした。そのため、〈大広間〉には様々な工夫が施されており、たとえば一の間の天井を「二重折上格天井」とし、また二の間より20cmほど床を高くしています。建築上の特徴だけでなく、描かれた障壁画の画題や

様式にも様々な工夫が施されています。

一の間と二の間に描かれた障壁画は、狩野探幽（1602-74）によって描かれたものです。ぐらりと部屋を取り囲むようにデザインされた松には、徳川将軍家の永遠の繁栄への願いが込められていると考えられ、また、松に添えられた錦鶏鳥は権力者への贈答品とされた珍しいものでした。巨大な複数の松は、一面の金地にその根本の地面を描かず、全容を画面の枠の内側に収め、また金雲等の松を隠すモチーフがないため、その形が鮮明に浮かび上がります。

松は、将軍の背後となる大床で、上段に座する将軍の頭上に傘を掛けるよう松を屈曲させ、大床の左右にあたる東面と西面で、将軍に向かって枝を傾斜させて枝葉を伸ばします。この構図は、中央に着座した将軍の威光を、見るものに強烈に印象づけるものでした。

明治時代の障壁画修理と〈大広間〉

二条離宮となり、皇族や外国の貴賓を迎えた二の丸御殿は、明治30年（1897）頃より、損傷の激しい廊下の天井や長押上の障壁画を中心に新たに描き直され、交換されました。それは、明治21年に明治宮殿の装飾を監督した京都帝国博物館の山高信離（1842-1907）が監督にあたり、当時活躍した画家の手で、正倉院の宝物の図案などが参考にされました。

明治33年、〈大広間〉の廊下の天井画は、改めて描かれました。廊下の格天井に取り付けられる予定の250枚のうち120枚の天井画が取り付けられたところで嘉仁皇太子の行啓があり、これを観賞して「美麗なり」と述べたことが、現在の「京都新聞」の前身である「日出新聞」に報じられています。

また、同じ時期に〈大広間〉の廊下の長押上障壁画も、三種類の箔の砂子によって雲形と霞が表され、大小の方形、細長い切箔が雲形の中にあしらわれ、胡粉の盛り上げによって波文様が象られたものに変えられました。

二条離宮になって行われた廊下の障壁画の新調により、寛永3年（1626）に描かれた障壁画と明治時代に描かれた障壁画が、二の丸御殿の中で共存することになりました。廊下を歩きつつ明治時代の新しい息吹を感じ、いまだ江戸時代の雰囲気が残る〈大広間〉に入室する、いわば新旧の融合を感じられる場所となったのです。